九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

白楽天「江南遇天宝楽叟」詩は何時詠まれたか

静永, 健
九州大学 : 准教授

https://doi.org/10.15017/1498242

出版情報：中国文学論集. 43, pp.85-94, 2014-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

白楽天「江南遇天宝楽叟」詩は何時詠まれたか

静永　健

『白氏文集』第十二巻の第五首、花房氏作品番号(1)〇五八二の作品は、白楽天が遭遇したある人物と、その者の語りによって展開される七言全三十二句の歌行体である（以下、本稿内では随時「遇楽叟詩」と略称する）。

江南遇天寶樂叟　　江南にて天宝の楽叟に遇ふ　　白居易

白頭病叟泣且言　　白頭の病叟　泣き且つ言る。
祿山未亂入梨園　　禄山の未だ乱せざるとき　梨園に入り、
能彈琵琶和法曲　　能く琵琶を弾きて法曲に和し、
多在華清隨至尊　　多ば華清に在りて至尊に随へり。
是時天下太平久　　是の時　天下は太平なること久しく、
年年十月坐朝元　　年年十月　朝元に坐せば、
千官起居環珮合　　千官は起居して　環珮合し、
萬國會同車馬奔　　万国は会同して　車馬奔る。
金鈿照耀石甕寺　　金鈿照耀す　石甕の寺、
蘭麝熏煮温湯源　　蘭麝熏煮す　温湯の源。
貴妃宛轉侍君側　　貴妃は宛転として君側に侍し、

白楽天「江南遇天宝楽叟」詩は何時詠まれたか

體弱不勝珠翠繁　体弱く　珠翠の繁きに勝へざるがごとし。
冬雪飄颻錦袍煖　冬雪飄颻として錦袍煖かに、
春風蕩漾霓裳翻　春風蕩漾として霓裳翻へる。
歡娯未足燕寢至　歓娯未だ足らざるに燕寝至り、
弓勁馬肥胡語喧　弓勁く　馬肥え　胡語喧し。
豳土人遷避夷狄　豳土より人遷りて　夷狄を避け、
鼎湖龍去哭軒轅　鼎湖に龍去りて　軒轅に哭す。
從此漂淪到南土　此れより漂淪して南土に到り、
萬人死盡一身存　万人死に尽え　一身存す。
秋風江上浪無限　秋の風ふく江上に　浪は限り無く、
暮雨舟中酒一樽　暮の雨ふる舟中に　酒一樽。
涸魚久失風波勢　涸魚のごとく　久しく風波の勢を失へり、
枯草曾沾雨露恩　枯草も　曾ては雨露の恩に沾ひたりしが。
我自秦來君莫問　我は秦より来たる　君　問ふ莫かれ、
驪山渭水如荒村　驪山　渭水　荒れたる村の如し。
新豐樹老籠明月　新豊の樹は老いて　明月を籠め、
長生殿暗鎖黄昏　長生殿は暗くして　黄昏に鎖さる。
紅葉紛紛蓋欹瓦　紅葉は紛紛として　欹瓦を蓋ひ、
緑苔重重封壞垣　緑苔は重重として　壊垣を封す。
唯有中官作宮使　唯だ有り　中官の宮使と作りて、
毎年寒食一開門　毎年の寒食に　一たび門を開くを。

〔『白氏文集』巻十二、作品番号〇五八二〕

従来この詩は白氏江州司馬左遷中の作と説明されてきた。まず日本の花房英樹『白氏文集の批判的研究』（一九六〇年初版、本稿注（1）参照）は、巻末の「綜合作品表」五二〇頁に「元和十一～十三年、江州」と表示する。またこの見方は中国においても同様で、王汝弼『白居易選集』（上海古籍出版社、一九八〇年、その一六四～一六七頁）のほか、朱金城『白居易集箋校』（上海古籍出版社、一九八八年、その第二冊六三二頁）、そして最新刊の謝思煒『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六年、その第二冊九〇六頁）など管見の限り全ての注釈がこれを踏襲し、異議をとなえる者は無い。しかし、この詩は本当に江州で詠まれたものなのだろうか。確かに詩題には「江南」の二字が冠せられている。だが姓名はもとより年齢すらよく判らないこの「天宝の楽叟」について、いま少し考えをめぐらしてみたいというのが、本稿を草した所以である。

一　白楽天何時詠此詩？

まずは白氏の経歴に沿って、彼がこの詩を詠む可能性のある時期を全て列挙してみよう。それは次の四期となる。

（A）貞元二年（七八六）。白氏数え十五歳。ときに彼は藩鎮の争乱を避けて南方に避難し、初めて蘇州、杭州を遊歴している。現在、白楽天の最も初期の作品群は『白氏文集』巻十三に配されるが、就中その第一作と思しいものに「江南にて北客を送り、因りて憑けて徐州の兄弟に書を寄す」詩（作品番号〇六七〇）がある。詩型は七言絶句。ここに言う「江南」が具体的に何処なのかは不明だが、蘇州もしくは杭州周辺であることは確かであろう。ただしこの時期、果たして「天宝の楽叟」と呼ぶに相応しい老人が彼の目前に現れたかどうかには大いに疑問が残る。それは仮に天宝元年（七四二）生まれの人物を想定しても、当時数え四十五歳であり、いまだ時期尚早と言うべきであるためである。

（B）元和十年（八一五）～十四年。白氏四十四歳より四十八歳。冒頭の花房氏以下全ての先行研究がこの時期に定めている。現在は江西省に属する江州を「江南」と称してよいかについては、『白氏文集』巻九所収の「新秋夕」詩（作品番号〇四四二）第五句に「其れ江南の夜を奈せん（其奈江南夜）」とあるので問題は無い。また元和十年と

もなれば、天宝元年生まれの人物もすでに数え七十四歳となっている。

（C）長慶二年（八二二）～四年。白氏五十一歳より五十三歳。中央官僚であった彼が一転して杭州刺史に出された時期である。従来指摘されたことのない期間ではあるが、「江南」の語義に従えば、その可能性は皆無ではない。白楽天が杭州を「江南」と称した例を一つだけ挙げておこう。『白氏文集』巻二十所収の七言律詩「早冬」詩（作品番号一三八六）冒頭に「十月の江南天気好し」と。なお天宝元年生まれの人物は、はや数え八十一歳を迎えていることになる。

（D）宝暦元年（八二五）～二年。白氏五十四歳より五十五歳。蘇州刺史赴任時代[3]である。言うまでもなく蘇州も「江南」と称するに足るその中心地の一つ。『白氏後集』巻五十一の「郡斎の旬暇に宴を命じ座客に呈し郡僚に示す」詩（作品番号二一九四）第十九～二十句「風流なる呉中の客、佳麗なる江南の人」がその一例となる。また天宝元年生まれの人物は八十四歳を迎えている。

以上のように、白居易が「江南」において天宝時代の生き残りである楽叟に遭遇したのは、それぞれに可能性の程度に差があるものの、都合（A）～（D）四つの時期を論述の俎上に載せることができるのである。

二　白楽天何処詠此詩？

では次に、同じ問いを今度は地域（江南）に重点をおいて、考察してみよう。

ただしその前に、白居易が天宝時代の長安を知る老人に遭遇したという事件は、もう一つ別な場所でも起きていることを指摘しておかねばなるまい。

（E）元和十四年（八一九）～十五年。白氏四十八歳より四十九歳。四川の忠州刺史[4]にあった時期である。

贈康叟　　康叟に贈る

八十秦翁老不歸　　八十の秦翁（＝康叟）　老いて帰らず、

南賓太守乞寒衣　南賓の太守（＝白居易）寒衣を乞ふ。
再三憐汝非他意　再三　汝を憐れむは　他意に非ず、
天寶遺民見漸稀　天宝の遺民　見ること漸く稀なればなり。

〔『白氏文集』巻十八、作品番号一一一二〕

この詩に登場する康叟は、かつて秦（長安）で生まれ育った老人であり、故あって（恐らくは安史の兵乱のために）この長江中流の鄙地に身を寄せ、今に至ったもののようである。白楽天がこのような盛唐の息吹きを伝える人や事物に対し、強い憧憬の念を抱いていたことは周知の事実[5]であるが、そこでいよいよ気懸かりなのは、白氏がこの康叟に出会う僅か二～三年前に、先述（B）の通り江州でも同様の老人に出会ったとすることである。筆者にはこの重複をどうしても受け入れることができない素朴な疑念がある。しかも右の贈康叟詩は云う。「天宝の遺民が（ちかごろは）見ること漸く稀」になったと。

さて、これも周知の事柄に属するだろうが、白楽天の遇楽叟詩は杜甫の七言絶句「江南にて李亀年に逢ふ」に対する尊崇（オマージュ）として作られたものである。杜甫の詩は大暦五年（七七〇）春、潭州（現在の湖南省湘潭市）で詠まれたとするのが、清初の朱鶴齢、そして仇兆鰲『杜詩詳注』（巻二十三）以来の定説であるが、白楽天の詩が杜詩に触発されてのものであるならば（これは疑う餘地は無い）、その楽叟との会面の地は、ただに江州のみに絞り込む必要は無いのではなかろうか。また、ここで再び冒頭の遇楽叟詩本文に戻って考えるならば、この詩の全三十二句に描かれている殆んどの部分は、現地である「江南」ではなく、長安東郊の華清宮である（第二句から十四句までが楽叟による天宝時代の回顧、そして第二十六句から結尾三十二句までが「我」が語る現在の荒廃したそれ）。ちなみに前章で列挙した四つの推定製作時期のうち、最初の（A）白氏十五歳説はここに完全に否定される。このとき、少年白楽天はまだ長安に行ったことは無く、当然ながら華清宮の内部や毎年春の寒食節に宮使が奉幣する等の細かな行事日程を知る由も無いためである。

そこで白楽天の作品、特にその後半生の『白氏後集』の作品群にも目を配るならば、そこに詠われる「江南」は明らかに彼がかつて刺史をつとめた杭州と蘇州とに絞られてゆく。今ここにその最も代表的な作品を挙げるならば、

白楽天「江南遇天宝楽叟」詩は何時詠まれたか

次の三首連作の詞となるであろう。

憶江南詞三首　此曲亦名謝秋娘毎首五句（此の曲亦た「謝秋娘」と名づく。毎首は五句）

江南好　風景舊曾諳　　江南は好し、風景　旧より曾て諳んず。
日出江花紅勝火　春來江水綠如藍　　日出でて江花　紅きこと火に勝り、春来の江水　緑は藍の如し。
能不憶江南　　能く江南を憶はざらん。　」（以上第一首）

江南憶　最憶是杭州　　江南憶ほゆ、最も憶ふは是れ杭州。
山寺月中尋桂子　郡亭枕上看潮頭　　山寺にては　月中に桂子を尋ね、郡亭にては　枕上に潮頭を看る。
何日更重遊　　何れの日にか　更に重ねて遊ばん。　」（以上第二首）

江南憶　其次憶呉宮　　江南憶ほゆ、其れ次には呉宮（＝蘇州）を憶ふ。
呉酒一杯春竹葉　呉娃雙舞醉芙蓉　　呉酒の一杯は　春竹葉、呉娃の双舞は　酔芙蓉。
早晩復相逢　　早晩か復た相逢はん。　」（以上第三首）

〔『白氏後集』巻六十七、作品番号三三六六～六八、開成三年（八三八）の作〕

第一首は全体的イメージにおける「江南」が、そして第二首はその「最憶」の地杭州、第三首は次なる蘇州が唱い上げられている。そもそも「江南」とは、単なる地図上の一点を指すだけの無機質な地名ではなく、その地特有の文化（音楽、舞踊、飲食など）を喚起させる奥深い味わいをもつ呼称である(6)。白楽天にとっての「江南」も、この六十七歳の曲子詞がまさにそうであるように、たおやかな楽曲と甘美な思い出とに包まれたイメージ豊かな「詩的舞台」であったと言えるのではなかろうか(7)。従って、この遇楽叟詩の繫年考証も、ある一城市に限定するのではなく、杭州・蘇州一帯をイメージして作られた、とでも言うべき、あいまいな考え方こそが、最も妥当な基本的解釈ではないだろうか(8)。

三　遇楽叟詩的主題是什么？

では、白楽天のこの詩はいったい何を詠じた作品なのだろうか。単なる偶然の出会いに非ず（従って天宝楽叟は実在しない）と仮定するならば、その創作意図についても更にもう少し追究しておく必要があるのである。

そこで本文中にこの問題を解く関鍵詞を求めるならは、それは皇帝の崩御についての描写であるだろう。すなわち第十八句「鼎湖に龍去りて軒轅に哭す」は、『史記』巻二十八の封禅書などに見える黄帝崩御昇天の伝説にまつわる表現である。また最終句の「毎年の寒食に一たび門を開く」も、その理由を尋ねれば驪山山頂に祀られる老子廟への宮使奉幣のためである。[9] この詩において、何故これほどまでに帝王とその死が明示されなければならないのか。私はこれこそが、この遇楽叟詩の創作意図に繋がるものだと考えたい。

天宝の皇帝玄宗李隆基の崩御は上元三年四月五日甲寅（陽暦七六二年五月三日）である。しかし、白楽天と皇帝の死、そして華清宮とを結ぶにおいて、更にあと二人の皇帝が思い起こされる。玄宗の五代孫に当たる憲宗李純と、更にその子穆宗李恆である。

憲宗の崩御は元和十五年正月二十七日庚子（陽暦八二〇年二月十四日）。穆宗は長慶四年正月二十二日壬申（陽暦八二四年二月二十五日）崩御。いずれも白楽天がその在位中に一時側近の一人として仕えた皇帝だった。

この二帝と華清宮とには、ともに浅からぬ因縁がある。

まず憲宗は、その在位中、みずから率先して財政再建に努め、その一策として華清宮への行幸を停止したことが、白氏の新楽府「驪宮高」（『白氏文集』巻四冒頭、作品番号〇一四五）によって語られ、賛美されている。『旧唐書』巻十五の本紀等に記されている通り、金丹の服用によって哀れ四十三歳で「暴崩」した（一説に内官の弑逆説あり）帝王ではあるが、このように英明にして決断力もあったのである。

さて、次にその皇太子穆宗について触れたい。白楽天が一時期その教育係（太子左賛善大夫[10]）としても仕えたことのある彼は、父帝の突然の死によって数え二十六歳の若さで即位した。しかし『旧唐書』巻十六の本紀をはじめ、史書に記録される彼の行動（特に観劇や遊幸への嗜好）は、皇帝として些か無節操なところがあったようである。

白楽天「江南遇天宝楽叟」詩は何時詠まれたか

紙幅の都合で詳述しないが、穆宗は元和十五年二月五日丁丑、天下に大赦令を発布したその場所（丹鳳門）で俳優百戯を陳ねて楽しみ、その十日後にも左神策軍で角抵（すもう）と雑戯鑑賞を楽んでいる(11)。また以下も同じく『旧唐書』本紀に基づくが、元和十五年六月二十三日癸巳（興慶宮で大合宴）、七月十四日甲寅（永安殿で百戯）、翌十五日乙卯（安国寺盂蘭盆に行幸）、同二十日庚申（夜、熒惑して羽林に入る）、同二十二日壬戌（安国寺等八寺を吐蕃の使者と観覧）、同二十六日丙寅（永安殿で宴楽）、八月二十三日壬辰（魚藻池行幸、神策軍二千人で浚渫）、九月二日辛丑（魚藻宮で競渡を観覧）、同九日戊申（重陽節の曲宴）等、数々の大規模な遊宴を楽しんでいる。そして、ここに特筆すべきなのが同年十一月二十日戊午、突如翌日の華清宮行幸を宣言し、御史大夫の李絳や左散騎常侍の崔元略らの再三の諫言を振り切って、綸言の通り翌二十一日己未「六軍の諸使、諸王、駙馬千餘人」を従えて行幸を果たしたのである（晩に至って還御）。その後、穆宗は給事中の丁公著の説諭（長慶元年二月条）によって、以前ほどの享楽的な行動は見せなくなるようであるが、再び長慶二年十一月十四日庚午、皇太子景王（のちの敬宗）に禁軍五百騎を率いさせ、実母の郭皇太后とともに再び華清宮に行幸している（今回は三泊四日の日程）。なお『旧唐書』本紀の記述中で注目されるのが、その当日「又石甕寺に幸す」の文字が見えることである。白詩第九句、楽叟の回顧する中に「金鈿照耀す石甕寺」とあるのは、もしかすると白楽天自身が穆宗に随行した際の見聞に基づいた可能性もあるのだ(12)。

以上を要するに、白楽天の「江南遇天宝楽叟」詩は、その最も可能性が高い製作時期として、穆宗の崩御した長慶四年（八二四）に比定することができる。だとすれば恐らくその執筆地は洛陽。その年の秋、杭州刺史からの召還を許された白楽天であったが、何故か洛陽の自邸（履道里）に引きこもったまま、長安には赴こうとはしなかったのである。この詩は、彼に対して異例の抜擢（中書舎人知制誥）と突然の左降（杭州刺史）とを命じ、そして父帝同様に丹薬の禍によって短命のうちに崩御された若い皇帝穆宗への追悼を込めた作品だと考えられるのである。

注

（1）花房英樹『白氏文集の批判的研究』（中村印刷、一九六〇年初版。のち朋友書店、一九七四年重版）付録の「綜合作

品表」に基づく白居易の作品番号。本稿では以下凡てこれを踏襲する。なお近年の謝思煒『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六年）および同氏『白居易文集校注』（中華書局、二〇一一年）にも独自に作品番号が付与されているが、規準が異なるので注意されたい。詳しくは静永『唐詩推敲』（研文出版、二〇一二年）所収「謝思煒『白居易詩集校注』の刊行を賀す」参照。

（2）白居易の江州司馬在任は元和十年（八一五）より元和十四年（八一九）までである。遇楽叟詩の場合、その第二十一句「秋風の江上に浪無限」とあるのが、この詩の〝現在〟の情景を詠うものだと考えられ、おのずから繫年範囲が狭まる。すなわち花房英樹『白居易研究』（世界思想社、一九七一年）所収の年譜考証および朱金城『白居易年譜』（上海古籍出版社、一九八二年）によれば、白居易の江州到着は元和十年の「初冬」であり、またその転出は元和十四年の「春」（三月下旬にはすでに転任先の忠州に到着）であるためにこの両年は繫年から除外されるのである。

（3）『白氏文集』の元来の形態と思われる「前集後集」型式（那波本および金沢文庫本）を想定すれば、前集である第十二巻に収められる作品はすべて長慶四年（八二四）以前のものと考えられるため、蘇州刺史時代の白居易の作品は含まれない筈である。しかし現在の第十二巻には「真娘墓」詩（作品番号〇五九五）や「簡簡吟」（作品番号〇六〇四）など明らかに蘇州での作品が存在する。これらが真に長慶四年以前のものであるか、あるいは後年の蘇州刺史時代の作の混入かは、いずれとも断言できない。

（4）静永『白居易「諷諭詩」の研究』（勉誠出版、二〇〇〇年）付録「忠州行記」、また静永『唐詩推敲』（研文出版、二〇一二年）所収「白居易の忠州」参照。この地が「江南」には含まれないのは当然であるが、更にこの重慶に隣接する長江中流域は、背後に深い森林を持ち、かつ江の両岸が急峻に屹立しているために、日照の関係からほとんど全ての城市が江の北側に作られている。

（5）竹村則行先生の論文「白居易と天宝の遺民――『贈康叟』詩をめくって――」（九州大学文学部『文学研究』第八十四輯、一九八七年）を参照。また本稿においては更にご著書『楊貴妃文学史研究』（研文出版、二〇〇三年）所収の論文「中晩唐における華清宮の零落」等も参照。

（6）『宋書』巻二十一、楽志三に採録される「楽府古詞・相和歌辞」に、まさしく「江南」と題された有名な曲詞があ

る。曰く、「江南可採蓮、蓮葉何田田。魚戯蓮葉間、魚戯蓮葉東、魚戯蓮葉西、魚戯蓮葉南、魚戯蓮葉北」と。江南のイメージが形成される核となった楽曲の一つであろう。

（7）この考え方は、実はその先蹤たる杜甫の「江南逢李亀年」詩にも当てはまる。晩年の杜甫が湖南の地で再会した老歌手に対し、特に「江南」の二字を冠するのは、この場所に宴楽の発源地たるイメージを付与するためであったと考えてよいであろう。地理的に見てここは「江南」とは言い難い。

（8）遇楽曳詩本文中、「江南」の地を最もリアルに描いている部分は第二十一句～二十二句の「秋風江上に浪は限り無く、暮雨の舟中に酒一樽」である。江上の風浪や舟、また美酒なども江南のイメージに合致するが、また「暮雨」の二字にも注目しておいてよい。『白氏後集』巻五十五所収「殷協律に寄す」詩（作品番号二五六五）最終聯に「呉娘の暮雨蕭蕭曲、江南に別れてより更に聞かず」とあり、その句に対する白氏自注に「江南の呉二娘の曲詞に『暮雨蕭蕭として郎は帰らず』と云ふ」と見える。「暮雨」は、当時の宴楽などにも唱われ、まさに「江南」のイメージに合致する情景として設定されているのである。

（9）寒食節の墓参の風習は、玄宗によって定着した。『旧唐書』巻八、玄宗本紀上、開元二十年（七三二）の条に「五月癸卯（一日）寒食に墓に上るを、宜しく五礼に編入し、永く恒式と為すべし。」とある。下って白楽天の頃には「寒食野望吟」（『白氏文集』巻十二、作品番号〇六〇一）などのように士大夫層にも寒食掃墓は一般化した。

（10）白楽天は元和九年（八一四）冬から翌年八月までの間、太子左賛善大夫として皇太子李恆（のちの穆宗）に仕えている。時に李恆は数え二〇歳。もしかすると最も難しい「成長期の後半」の出会いであったか。

（11）『資治通鑑』巻二四一の同年同月条には、衡山人（衡山の道士か？）の趙知微なる者が皇帝の「遊畋無節」を上疏して諫めたという。穆宗は取り上げなかったが、また趙知微を罰することも無かったという。

（12）ただし、白楽天が左遷地より穆宗朝に召し還され、その高官（中書舎人知制誥にまで至る）であったのは、史書の記録では元和十五年十二月二十八日丙申から長慶二年七月十四日壬寅までであって、『旧唐書』穆宗本紀が記す二度の華清宮行幸とは合わない。この点については更に史料の考証が必要である。